



## CONTENTS

- 平成30年度立正大学FD活動について
- 平成29年度立正大学ベスト・クラス賞受賞者紹介
- 平成29年度ベスト・クラス賞受賞者  
木川 裕先生 受賞科目紹介
- 平成30年度新任教職員SD研修会開催報告
- 平成30年度FD推進ワークショップ参加報告
- 6・7 学士課程教育の質保証へ向けて  
——初年次教育・導入教育から学士課程教育への展開——
- 8 アンケート結果報告

# Rissho University FD News Letter

Vol.21  
August, 2018

## 平成30年度立正大学FD活動について

立正大学長 齊藤 昇

立正大学におけるFD活動は、教育力の向上を目指して恒常的に実施してきています。大学を取り巻く環境の変化は大学教育の見直しを必須のものとしており、従来の教育の内容を変革する必要性が早くから指摘され、立正大学のFD活動も教育の質的転換を目指して鋭意進めてきております。

平成26～28年の3年間は「教育方法の工夫と改善におけた優れた取り組みの全学的共有」を活動テーマとしました。平成30年度の活動テーマは、29年度に引き続いて「学士教育課程の質保証へ向けて—導入教育から学士教育への展開—」としております。

立正大学は、仏教系の大学として独自の建学の精神を掲げ教育を行ってまいりました。仏教は日本文化の基底を形成する重要なものであり、仏教精神を基盤とする立正大学は、誇りを持ってその精神を教育に反映

して実践する必要があります。

このため立正大学の教育は、初年次教育・導入教育において建学の精神を広く涵養する必要があります。初年次教育・導入教育は大学教育の始まりとして、大学への順応を促す意味においても重要であり、入学生の目線で学問への導入を促進する点が肝要であります。学士教育においては、それぞれの専門教育とともに、深い教養力の確保も重要であり、このうちには一定程度の英語力の獲得も含まれます。

このためには、新任教職員は勿論のこと、すべての教職員に意識した教育内容の刷新を求めています。時流に適合した教育内容の改革は大学の責務であり、選ばれる大学としての努力が不可欠と認識されます。

立正大学の豊かな明日を拓くために、全教職員の積極的な改革への参画を求めます。

# 平成29年度 立正大学ベスト・クラス賞 受賞者紹介

授与式日時

平成30年3月16日（金）13:30～

立正大学では、平成27年度より教育方法の工夫また改善に取り組み、質の高い授業を实践したことが認められた授業科目および授業担当教員に「立正大学ベスト・クラス賞」を授与し、顕彰しております。

平成29年度は4つの授業科目が選出され、担当教員への授与式が開催されました。以下、授賞者をご紹介します。



永井 智 先生

(心理学部 臨床心理学科 准教授)

授業名：心理学研究法ⅠB

受講者数：50名

この度は光栄な賞を賜り誠にありがとうございます。本授業では、毎回の授業で出席カードの提出を兼ねて授業評価を実施し、各回の学生の取り組みを数値評価するとともに、授業への疑問や要望を随時受け付ける形をとっています。初めは学生のフィードバックを直視することに不安もありましたが、馴れてくると、学生との対話を通して迅速な授業改善に役立っていると感じています。今回このような賞をいただくことができたのも、積極的にフィードバックをくれる学生さんのおかげと思っています。今後も、学生との対話を続けながら継続的な授業改善・研鑽に努めてまいります。



笠置 遊 先生

(心理学部 対人・社会心理学科 講師)

授業名：コミュニケーション心理学

受講者数：166名

この授業では、コミュニケーションの基礎知識とその応用に関する社会心理学的知見を紹介しています。学生の学習意欲を高めるため、比較的新しい研究の紹介、視覚的に分かりやすいスライド作り、コメントシートへのフィードバック等を行いました。また、簡単なコミュニケーションゲームや質問紙を実施し、自らの体験を通して授業で得た知識を実践につなげられるよう工夫しました。本授業を通して、人が円滑なコミュニケーションを行うためには何が重要なのか、研究テーマとしてだけでなく、自身の課題としても考える姿勢を身につけてもらえたらと思っています。



臧 俐 先生

(非常勤講師)

授業名：教育職の研究 B

受講者数：68名

この講義では、教職の在り方、教員を巡る現状と政策を取り上げています。教員を目指す学生に、自らの品格の涵養、学識の蓄積、指導力の向上を自覚してもらうように心がけています。講義中心の授業ですが、明確な説明、ポイントの提示、ノートを取らせる工夫、資料の下線引きによる理解の強化、復習の徹底などに努力しています。時にはグループ討論と発表、ミニレポートと完成度の高いものの模範提示、小テスト、ニュース映像等の動画の使用も行っています。1人でも多くの学生に教職の面白さと厳かさを同時に実感し自覚してもらいたいと考えています。



木川 裕 先生

(非常勤講師)

授業名：情報処理の基礎Ⅰ(社福A)

受講者数：54名

木川先生の受賞科目につきましては、次ページのベストクラス賞受賞科目紹介をご覧ください。

## ベスト・クラス賞受賞授業における 授業見学の実施のお知らせ

2017年度ベスト・クラス賞受賞授業を担当する心理学部笠置遊講師による授業見学を10月29日(月)4時限目に開催いたします。実践事例の共有を図ることを目的としていますので、この貴重な機会に是非ご参加ください。詳細が決定しましたら、学内掲示および本学教職員にはメールでお知らせいたします。



## 平成29年度 ベスト・クラス賞受賞者 木川 裕先生 受賞科目紹介

木川 裕 先生 (非常勤講師)

授業名：情報処理の基礎 I (社福 A)

受講者数：54名



熊谷キャンパス A104端末室での授業風景

この度はベスト・クラス賞という素晴らしい賞を、特に、学生に評価していただけたということ、大変うれしく思っています。

この授業は「情報処理の基礎」という科目で、PCの基礎知識や仕組みを理解してもらい、大学での授業や仕事に必要な基礎的技術の習得を目標としています。そのため、講義は実際にPCを操作して行う実技授業となっています。

初回の授業では、学生のPCに関する学習歴や利用歴のアンケートを取っていますが、その後の授業の進め方の参考にしています。情報の授業は高校でも実施されていますので、コンピュータを初めて触る学生はほとんどいませんが、PCに関する技能や意識には大きな違いがあるようです。そのため、授業ではレベルの異なる学生のモチベーションをどのように1つの授業で高めていけるかが大きなテーマだと考えています。というのも、PCが得意な学生も苦手な学生もいるなかで、実技として1つの課題を実施するわけですが、その際、得意な学生に合わせた課題では苦手な学生は授業が苦痛になってしまいますし、簡単な課題では得意な学生は退屈な時間を過ごすことになってしまいます。そこで、できるだけ入り口は抵抗感なく入っていきやすい課題にしています。しかし、得意な学生でもなるべく退屈しない新しい発見を感じられる内容を心掛けるようにしました。

たとえば、授業の早い段階で「マニュアルの作成」という、PCのモニタ画面やダイアログボックス、ツール等のキャプチャー方法を学習する授業を用意しています。PCの作業用マニュアルを作成する課題ですが、

「ほかの誰かがそれを見て実際にその作業ができるようにわかりやすく作成してください」と注文を付けるようにしています。実際、学生の皆さんはそれぞれ工夫してわかりやすいマニュアルを作ってくれます。得意な学生は、そのままテキストとして使えるようなレベルのものを作りますし、苦手と言っていた学生も楽しそうに結構なレベルのものを作ってくれます。

教科書を使わない授業であることを利用して、授業のノート作りも兼ねて、その後の授業でも実際の学習と並行して授業内容のマニュアルを作成するように指導しています。

ところで、授業での工夫とはちょっと違いますが、心構えのようなものがあります。私には中学生の子どもが2人いるのですが、自分の大切な子どもに「先生がこう接してくれればうれしいな」と思えるような授業ができるように意識しています。そのために、「いつも笑顔でいること」、「気軽に質問できるようなフレンドリーな雰囲気を作ること」、「優しく丁寧に答えること」の3つを心掛けています。

昨年のアンケートのコメントにも書かせていただきましたが、良い授業は教員1人の頑張りでは達成できるものではありません。良い教員や良い授業は、良い学生の皆さんの協力があって初めて生み出されるものと信じています。私は毎年、素晴らしい学生に巡り合えてとても幸運な教員だと思います。学生の皆さん、良い授業をありがとうございました。

受講した学生からのメッセージ



# 平成30年度 新任教職員SD研修会開催報告

日 時：平成30年6月6日（水）13:45～17:30

場 所：品川キャンパス1号館1階第3会議室

参加者：26名（教員18名、職員8名）

## 【平成30年度】新任教職員SD研修会プログラム

1. イントロダクション  
研修内容説明、資料確認等
2. 役員講話  
理事長講話、学長講話
3. 講義  
「大学を取り巻く周辺動向と立正大学の現状」
4. グループワーク  
テーマ別グループワーク、成果発表
5. まとめ、アンケート記入

法学部法学科 岡崎 まゆみ

今年度、学部1年生対象の基礎ゼミナールを担当しています。4月はじめ、期待と不安が入り混じる緊張した表情で静かに座っていた学生たちを前に、誰より複雑な心持ちなのは私だったと思います。なぜなら、彼女たちと同様、私も立正1年生だからです。本学で学修した先に広がる未来を、教員として、本来であれば最初に少しでも示してあげたいところ、辞令を頂いた数日後に学生の前に立つ身には、残念ながらそれができなかったのです。



「立正らしさ」とは——私が最も知りたかったことが本研修会の柱でした。とくに記憶に残っているのはグループワークで、①立正大学らしさを発揮する社会貢献・地域貢献、②18歳人口減少社会を生き抜くための立正大学の課題、③150周年（2022年）を機に取り組むべき事業、の3テーマから、私のグループは「18歳人口減少社会を生き抜くための立正大学の課題」を選択し討議をおこないました。メンバー相互に「立正らしさ」をよく分かっていない中ではありましたが、ある先生の発展的な大学に求められる教職員の「オープンマインド」のお話は深く印象的でした。新任教職員に、かくあるべしではなく、これからの「立正らしさ」を問

いかけるしなやかな、オープンマインドの雰囲気が本学の魅力の一つだという気づきを得た貴重な研修会でした。

4月に静まり返っていた基礎ゼミナールの教室は、今ではだいぶ賑やかになりました。彼、彼女たちが卒業を迎える2022年、本学150周年に向かって、しなやかさをもって次世代の立正大学ブランドに少しでも貢献できるよう職務に励んでまいります。

学長室広報課 佐藤 博則

研修会では、まず「大学を取り巻く周辺動向と立正大学の現状」について講義が行われ、本学を就職率や退学率などの様々な数値を用いて客観的に理解することに取り組みました。また、近年の本学におけるアクティブ・ラーニングの推進に代表される各種取組みと国による教育政策の関係や、直面する18歳人口減少が本学に及ぼす影響をシミュレートした結果を知ること、私自身の認識の甘さや知識の乏しさを痛感する結果となりました。大学淘汰の時代にあって、本学が生き抜くためには今後どういった点に配慮しながら職務を行っていけば良いのかを考える上で非常に有意義な時間となりました。

その後は教職協働でのグループワークが行われ、私達のグループは「立正大らしさを発揮する社会貢献・地域貢献」をテーマに議論を行いました。各キャンパスの立地条件の違いを考慮した上で、熊谷キャンパスではより一層の地域貢献範囲の拡大を、近隣に複数の大学がある品川キャンパスでは、まずは地域での認知度向上を課題として取り組む必要があるとの結論に至り、広報課職員として、今後どのような方法で何をアピールすれば本学のPRとなるのかを改めて考える機会となりました。

この度、母校である立正大学の正職員となりましたが、本研修で学んだ事を業務に活かすだけでなく、研修を通して交流を深めることが出来た教職員の方々との関係も大切に、初心を忘れず日々の職務に邁進してまいります。





# 平成30年度 FD推進ワークショップ参加報告

日 時：平成30年6月16日（土）  
場 所：TKP 東京駅日本橋カンファレンスセンター  
参加者：6名（教員4名、職員2名）  
テーマ：私立大学とダイバーシティ  
～教育現場・教育支援の視点から～

学生部学生生活課 王丸 一志

当日プログラム：

1. 問題提起「私立大学におけるダイバーシティ&インクルージョン推進の意義と重要性」  
荒金 雅子氏（株式会社クオリア 代表取締役）
2. グループ討議
3. 総括

（研修概要）

本年度の私大連主催「FD 推進ワークショップ（専任教職員向け）」では、はじめに荒金氏から問題提起があり、その後事前提出した討議レジュメをもとに、ダイバーシティ、学生支援、合理的配慮等の取組事例、施策とその結果、今後の課題等について、グループごとに意見交換がおこなわれました。

社会福祉学部社会福祉学科 児嶋 芳郎

## 全体講演

現在の大学においては、障害学生、留学生、LGBT学生を対象としてダイバーシティが理解される場合が多いと考えられますが、人間の多様性とはこれらに限定されるものではありません。多様性を困難点ととらえるのではなく、逆に組織のストロングポイントとしていく視点が必要になっていくでしょう。

特に、「アンコンシャス・バイアス」（無意識の偏見）という視点は、多様性をストロングポイントとして考える場合に、明確に意識していかなければならないものであると感じます。これは、FD・SD等において、共有したい認識です。

## ワークショップを終えての感想

本学には障害学生支援協議会があり、具体的な支援においては障害学生支援室が対応していますが、現状では多様なニーズを抱える学生たちに十分な対応をできるだけの体制が整備できているか難しいと考えます。

全学的に統一的に、また体制を充実させていくためにも、今回の研修において確認したように、全学の各関係部署の職員および障害学生支援室の職員、各学部の教員が参加し、障害学生への支援体制の整備及び個別具体的な対応の在り方について検討する組織を整備していく必要があるのではないのでしょうか。

## グループ討議

グループ討議では、各参加大学のレジュメをもとに、問題点の共有を行ったあと、良い取り組み事例（グッドプラクティス）および対応困難案件（困ったシリーズ）に関する意見交換を行いました。

下記はグループ討議での事例抜粋になります。

- ・自己推薦入試における書字障害学生の要望「誤字を減点しないで」  
結果的に内容が水準に達していないため不合格となったが、当該学部での学びの主目的は別のところにある（誤字をなくすことが主目的ではない）ため、対応すべきなのか。
- ・車椅子学生のための教務上の教室配置移動  
エレベーターのない棟が複数あるため、たった一人であっても車椅子学生が教室移動困難となってしまった場合に、当初想定した教室配置を全体的に修正する必要が生じる。
- ・障害学生のみならず障害教員・職員への対応を求められる場面も増えている
- ・LGBT学生の意見には「普通に扱ってほしい（特別対応を求めない）」というものが多い
- ・相談室にはほぼ必ず専任教職員が配置されている（修士学位や博士学位を持つ場合も）

## ワークショップを終えての感想

特に障害学生支援にあたって、本学において整備されている部分・未整備の部分が浮き彫りになりました。場合によって全学的・組織的対応が必要になる場面においては担当部署として意見を発信することはもちろんであり心がけたいですが、全学課題として学長室の積極的な対応が必要となる場合も多いと思いました。



## 経済学部の取り組み 教員インタビュー

### 「学士課程教育の質保証へ向けて——初年次教育・導入教育から学士課程教育への展開——」

経済学部経済学科 ホーマン 由佳 教授  
経済学部経済学科 慶田 昌之 准教授

〈インタビュー日時〉

2018年7月13日（金）15:00～15:50

立正大学 品川キャンパス1号館2階 第2会議室



経済学科 ホーマン先生(左) 慶田先生(右)

——本日はお忙しいところお時間をいただきましてありがとうございます。初めに、初年次教育について、経済学部における特徴的なプログラムをご紹介します

全学共通のプログラムである「学修の基礎」では、少人数クラス制を導入し、基本的には本学部の全教員がクラスを持つ構成としています。学修内容としては、「学修の基礎Ⅰ」は大学の沿革や建学の精神を学び、「学修の基礎Ⅱ」は教員それぞれの専門性を生かしたアカデミックスキルを習得します。この「学修の基礎」と基礎科目が核となっており、ここをクリアすれば2年次からの学びへスムーズに移行できます。基礎的な内容なので難易度としては高くありませんが、多様な学生に対応するため、教員が丁寧に取り組み専門教育への橋渡しとしています。

学部統一的な内容としては、3年前より導入している「ニュース時事能力検定」対策が挙げられます。この取り組みは、経済学への学修意欲やモチベーションの向上を目的の一つとしており、授業の冒頭において検定への対策講座をおこなう形で取り入れています。最終的には検定を受検し、合格することが望ましいですが、2年次に実施している日経新聞とのコラボレーション授業の導入として、世の中の常識を身に付けるという狙いもあります。

——経済学部では、本年度より3コース制を導入していますが、その狙いや目標を教えてください

他大学の経済学部でも同様のことが言えますが、入学先として「経済学部」を選択する理由や目的が明確ではないケースが多く見受けられます。その課題を克服するべく、本学経済学部の強みである英語教育に一層力を入れるための「国際コース」、金融機関を就職先として見据えた「金融コース」、また、従来の学部教育を踏襲する「経済学コース」の3コースを設置しました。「国際コース」「金融コース」はいずれも少人数の特別コースであり、明確な目的意識を持つ学生が集まることを狙いとしています。その結果、経済学部全体にとってもプラスの影響を与えるのではないかと考えています。

国際コースでは、グローバル社会に適応する人材育成を目指して、2年次以降には必ず海外語学研修へ参加することとしています。それに向け、1年次より体系的に英語プログラムが組まれており、具体的にはスカイプ英会話や留学準備コースなどを設置し、2年次以降の語学研修や実践的な英語力涵養の導入としています。

「金融コース」では、金融に関する深い理解と資格取得を主な目的としています。従来は、学生が何らかの資格を取得することが就職活動をおこなう際の強みになっており、その都度教員が資格取得に向けての指導をしていました。しかし、その取り組みが入学前の学生に周知されることはありませんでした。そこで、就職先を見据えた本コースを設置し、目的意識をもつ学生に対し、段階を踏んだきめ細かい指導をおこなうことを強みとして打ち出しました。1年次の簿記から始まり、4年間を通し経済学を軸とした体系的な学びによる金融への深い理解と同時に、金融に関する資格取得を目指すカリキュラムとなっています。

——近年の学生の特徴について、どのような印象をお持ちでしょうか

これまではグループワークやプレゼンテーションに対し、苦手意識を持つ学生は少なくありませんでした。しかし最近では、特に国際コースの学生について言えば、授業内で英語を話すことや人前での発表などにも抵抗

がないように感じます。

全体としても、年次が上がるごとにプレゼンテーションスキルが大幅に向上していますが、それは学生同士のグループワークなどの協働作業や発表の機会を多く設け、経験を踏んでいることが要因ではないかと考えています。学生の気質が真面目なので、1つずつ課題を乗り越えることで自然と成長しているのではないのでしょうか。

#### — 入学前教育のカリキュラムの特徴はありますか

入学前教育として、外部の通信教育を導入しています。DVDによる講義とテストから構成され、英語や数学、TOEIC講座などのプログラムを用意しています。進捗状況確認などのフォローもしっかりしており、達成率が非常に高いです。また、プレテストとアフターテストの結果を比較すると、確実に点数が上がっており、成果を実感しています。この取り組みは現在、経済学部のみですが、全学で取り入れるべきではないかと考えています。

#### — 補習授業等、授業外での取り組みをお聞かせください

「経済学コース」の重要な取り組みとしては、経済フィールドワークが挙げられます。ビジネス現場や地域の政策決定の場などに赴き実状を通して学ぶことで、経済学への興味関心向上も図っています。これは非常に人気の高い授業であり、成果も一定程度見られるので、今後も継続したいと考えています。

また、英語教育の一つとして、TOEICの夏期講習を実施しており、結果としてTOEICのスコアも大幅に向上しています。特に1年次から2年次の伸び率が大きく、大学全体としては文学部英語英米文学専攻コースの次に高い伸び率となっています。この結果をみると、1年次の英語教育は成功していると考えてよいでしょう。

#### — 現在導入している新しい取り組みや、今後導入予定のプログラムがあればお聞かせください

これは今年度の個人的な取り組みになりますが、一部の授業では無料のe-learningを利用し、授業内で扱った内容を選択式クイズとして出題する試みをおこなっています。1週間に何回でも繰り返し解答が可能なため、クイズに合格した学生にはその結果を加味して、成績評価をおこなっています。今後も様子を見ながら、このような新しい取り組みを積極的に取り入れていきたいと考えています。

また、前述の日経新聞とのコラボレーション授業に



ついて、こちらも非常に人気が高いのですが、運営費が高額であり、準備にも時間を要します。しかし、学生の学修意欲の向上につながっている実感があるので、今後も積極的に継続したいと考えています。事前知識なく日経新聞を読み解くのは難しく、学生にとっては馴染みのない単語ばかりですが、それらを理解できれば就職後に大きな強みになると思います。「ニュース時事能力検定」対策などを通し、レベルの高い授業を理解するための基礎能力を向上させる仕組みも必要です。今後は知識の修得と、モチベーション向上のための施策を上手く組み合わせたプログラムの開発が必要になると考えています。

#### — 最後に、今後の課題やビジョン・方向性についてお聞かせください

学部全体としては、これまで以上に経済学を学ぶ意欲やモチベーション向上に向け、教育内容をいかに工夫・改善し継続していくか、ということに焦点をあてたいと考えています。国際コースとしては、1年次の基礎的な英語力の涵養から始まる段階的な学修を経て、卒業後の就職先として外資系企業やグローバル企業で活躍できる学生を輩出することも目標の一つとしています。

最後に、現在の学士課程教育においては、「抽象的な言葉を操作する力」が非常に重要であり必須の能力だと考えています。本学部においては、経済学や英語を学び、プレゼンテーションスキルを向上させると同時に、一層そのような力をつける方法を考えていくべきであると感じています。そしてこのような取り組みは、今後の高等教育全体にとっても必要であると考えています。

#### — ありがとうございました

インタビューー

学長室 総合経営企画課 相原百合絵 佐々木愛美



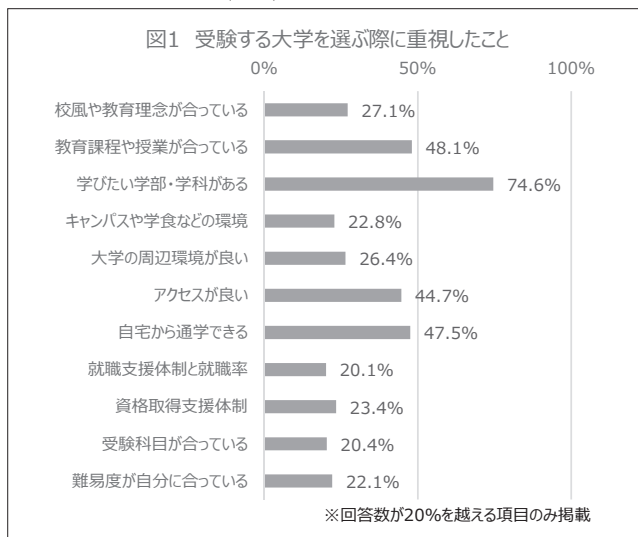
# アンケート結果報告

## 新入生アンケートの実施について

2018年度入学生を対象に、新入生アンケートを Web 方式にて実施しました。回答率は全学で85.8%と対前年度で8.4ポイントのマイナスとなりました。

### 新入生アンケートから見えるもの

新入生の大学選定基準を見ると、当然のことながら「学びたい学部・学科がある」が第一優先事項ですが、それに続く要素として「教育課程や授業が自分に合っている」、「アクセス至便」、「自宅から通学可」が挙げられました。これらの項目は、いずれも女子学生が男子学生を10ポイント程度上回り、50%を越える結果となりました。また学生支援の項目では、就職・資格支援が高く、奨学金や生活支援を重視する学生は極少数に留まりました。(図1)



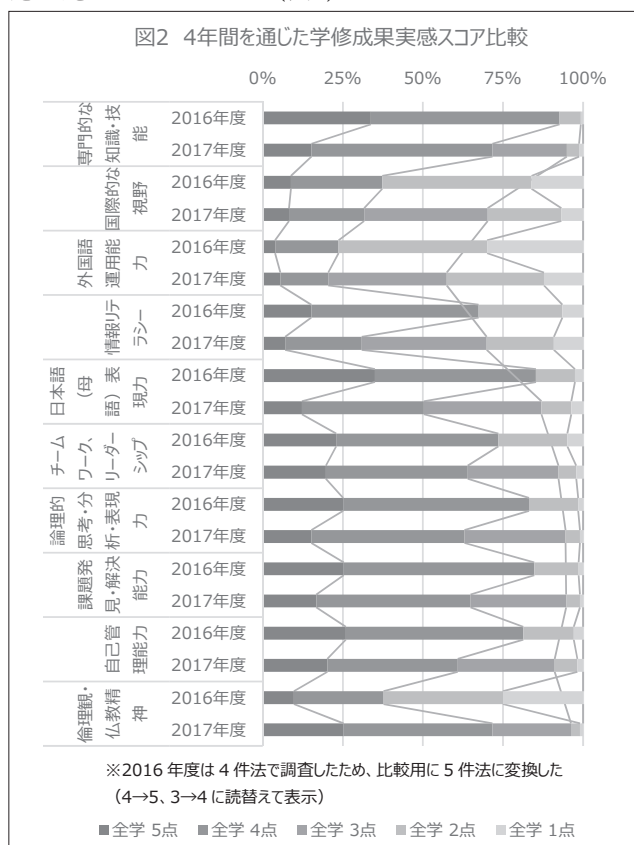
こうした傾向は、過去3年間大きな変化は見られず、入学者の志向も同じ傾向が続いているものと考えます。今後、退学率や学生満足度等についても情報公開が求められますが、こうした情報が新たな大学の格付けにつながるものが懸念されます。それがどの程度大学選別に影響を及ぼすのか、受験生の関心度からの予測を行うとともに、引き続きアンケートによる動向調査を行っていきます。

## 4年生満足度アンケートの実施について

2017年度4年次在籍者を対象に、紙媒体でのアンケート調査を実施しました。回答率は平年並みの全学で65.1%となりました。

## 4年生満足度アンケートから見えるもの

今回のアンケートでは、4年間を通しての学修成果実感について、その評価基準を「入学時」との比較から、「新社会人」になるにあたっての期待値との比較に変更し、5件法にて実施したところ、前年度までの回答の実態が見えてきました。(図2)



これまで印象がマイナスに振れていた「国際的な視野」、「外国語運用能力」については、3点、いわゆる「どちらとも言えない」がネガティブ票として反映されていたため大きな印象差はないものの、「情報リテラシー」や「日本語表現力」については、その反対の現象が起きていたことがわかります。

また「新社会人」としての期待値を意識したことで、スキル系項目で十分な成果が得られたと感じる割合が減っていることが推察されます。

課程修了時の到達レベルの明示とそれに対する学修成果の可視化が求められますが、特に非認知的能力の指標開発と評価にあたっては、こうしたアンケートを通じた間接評価による相互補完が、精度向上に不可欠と考えます。